



勝木保次先生 追悼のことば

日本生理学会特別会員・勝木保次先生（日本学士院会員，東京医科歯科大学名誉教授，生理学研究所名誉教授）は平成6年3月6日朝，心筋梗塞のためにご自宅で88才3ヶ月の生涯を閉じられました。数々のご業績を上げられ，また学界にも社会にも大きな貢献をされた後に，悠々自適の10年余りを過されてのご逝去ですから，まさにあらゆる意味で天寿を全うされたと申し上げることができます。先生ご自身も晩年の文章の中で「……そして長い研究生活を振り返れば，十分に満足できる人生であったことを誇りに思う今日このごろである。」と結ばれておられます。しかし，いざ亡くなられてみると，残された私たちにとってはまことに淋しい限りで，ただただご冥福をお祈りするばかりです。

先生は明治38年石川県小松市でお生まれになりました。小松中学，旧制三高を経て東京帝国大学医学部

を昭和6年にご卒業になられました。4人兄弟の3番目でしたが，ご兄弟はすべて医学を学ばれ，次兄の故新次氏も生理学会特別会員に推挙されておられたので，ご記憶の方も多いと存じます。大学卒業後橋田邦彦先生の門に入りましたが，「何があっても食えるように臨床医学を学んで来い。」とのご指示で耳鼻科で約3年間学ばれた後に生理学教室へ移られました。この間に耳鼻科を学ばれたことは，ライフワークとなった聴覚機構の研究にとって大きなプラスとなったことと思われます。

数度の応召の後，九死に一生を得て帰国されてから側線神経の研究に着手されました。約10ヶ月の苦闘の後ようやく単一側線神経放電の記録に成功されたことは，私たち門下生がよくきかされた話でしたが，戦後の混乱期で実験器材もすべて手づくりで進めていかなければならなかった時代に，新しいことに挑戦され

たために多くの時間を使われたので、決して同じことを単純に繰り返した10ヶ月ではなかったのだらうと思われます。先生はまたこの間に側線器の構造についての研究も進められ、成果を上げておられます。「困難な研究に向うときは、逃げ道となる研究も平行してやるように。」というお教えは、先生のこのご体験から出たお考えでしょう。先生は単一神経放電の記録に目処がつきはじめた昭和24年4月から東京医科歯科大学医学部教授に就任されました。

昭和27年第1回文部省在外研究員として渡米された先生は、米国各地や帰途寄られた欧州で多くの研究者と知り合いになられ、そして多くのものを学んで帰国されましたが、その最たるものは微小電極法でしょう。微小電極法は勝木先生から日本中の若い研究者に伝えられたといっても過言でないと思います。さて、勝木先生はご自身の研究として微小電極法を使って脳内の聴覚受容機構の研究に着手されたのですが、その時に von Békésy 博士(1961年ノーベル賞受賞)の「内耳での周波数分析は不十分なので中枢で尖鋭化がおこるだらう。」という予測が参考になりました。聴覚中枢の上部へ行くに従ってニューロンの周波数同調曲線が尖鋭化され、またこの尖鋭化は視床で完成し、大脳皮質では情報の統合がおこっているということが明らかにされました。この結果は高い評価を受け、昭和37年朝日文化賞、昭和38年日本学士院賞が授与されました。

昭和39年から3年間は医学部長を務められるなど校務に忙殺されることが多くなりましたが、この間にも California 大学 Bullock 教授と日米科学協力事業としてイルカの聴覚の神経機構の研究を手がけられ、

成果を上げられました。

昭和42年9月から2年間、敬愛する von Békésy 博士の招きを受けられて、Hawaii 大学感覚科学研究所で研究生活を送られました。何事ものんびりとした土地柄と離島の検疫体制のために予定した実験は行えなかったので、再び側線器の研究に着手し、側線器の化学受容性を発見されました。この意義については国際的な論議を呼び起しましたが、その後の先生の研究テーマの一つとなりました。

昭和46年、東京医科歯科大学を定年退職されて、鶴見大学歯学部教授とされましたが、かねて努力を続けてこられた「生理学研究所」設立運動に一層の力をそそがれました。生理学研究所が岡崎市に誕生したのは昭和52年のことですが、この間の設立準備委員長としての先生のご活躍は特筆すべきことでしょう。昭和47年には日本学士院会員に選出され、翌48年には文化勲章を受章されて、名実共にわが国の生理学の頂点に立たれました。昭和49年には東京医科歯科大学に学長として迎えられ、生理学研究所の発足に際しては、同時にスタートした基礎生物学研究所と合せて統括する生物科学総合研究機構の機構長に学長の任期を残して転じられました。これらの学界へのご貢献に対して昭和54年勲一等瑞宝章を授けられました。前記機構長を退任された後も、日本学士院会員として更にご活躍を続けてこられましたのに、この度は突然のお別れとなってしまうました。生理学会にとってかけがえのない方を失なったという感を強くいたしております。どうか安らかにお休み下さいように、心からお祈り申し上げます。(柳沢慧二)